

3. 霊と真理をもってする礼拝—イエスの宗教観Ⅱ

(1997年3月16日)

讚美歌 4、272

聖書 ヨハネによる福音書4・16－26

イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。あなたには5人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

まえおき

前回はイエスの神観からその宗教観を考えてみましたが、今回はその礼拝観からイエスが宗教をどのように観ておられたかを探ってみようと思います。

「礼拝」は、宗教によって必ずしもこの名称を使うとは限りませんが、宗教行事の中心であると言ってよいでしょう。

ところで前回私どもは、イエスの宗教観によれば宗教とはどこまでも“a private matter”(私のこと)であることを学びました。その通りなのですが、それとはまた別の意味で「宗教」は「公おおやけ(public)」のことでもあります。イエスに「隠れているもので、……公にならないものはない」(マルコ4・22)と

という言葉がありますが、「隠れたところにおられる存在と、内面的な人柄」との関係（宗教）で「あらわにならないものはない」のです。一般に「宗教」に必須と考えられている「礼拝」は、実はこの目に見える形の礼拝のことです。このことを頭において以下の話を聞いて下されば幸いです。

「ヨハネによる福音書」について

さて今朝のテキストは「ヨハネによる福音書」からです。「マルコ」によって始まった「福音書」は、「マタイ」と「ルカ」に発展しましたが、その約10年後（90年代後半？）同じ文学類型によりながらも、恐らくこれら3つの福音書（「共観福音書」と呼ばれる）とは伝承的にかなり隔たった異色の福音書が生まれました。それがこの（第4）福音書です。その成立の場所を特定することは困難ですが、この福音書を生み出した信仰共同体は伝統的に「ヨハネ教団」と呼ばれています。

この福音書の歴史的背景を少々申し述べます。70年の第二神殿崩壊後、ユダヤ教はヨハナン・ベン・ザカイを指導者とし、地中海沿岸の古代都市ヤブネ（ヤムニア）に学塾（ユダヤ教の学問の場）を設け、さらにエルサレムから最高法院をそこに移して、その再生を計りました。このラビのユダヤ教は自らの正統性を維持するために、あらゆる異端を排除しようとしたのですが、その主要な標的となったのがキリスト信徒でした。「ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである」（ヨハネ9・22）という説明は、一世紀末にヨハネ教団が直面していた歴史的状況を反映しているものと考えられています。ヨハネ福音書は、こうした危機的状況の中で「イエスはメシアであると公に言い表す」信仰を確立する必要に迫られて、成立した文書であると言えます。

これがヨハネ教団に対する外からの試練であるとするれば、この信仰共同体はその内部にも大きな問題を抱えていたと考えられます。ヨハネ福音書には共観福音書に見られる主の晩餐を制定する話（マルコ14・22-26）がありません。代りに、それに当たる箇所にイエスの洗足の話（13・1-20）が入っています。では聖餐制定に当たる話が全く無いかというと、実は6章の「命のパン」の説話（6・22以下）がそれで、そこには「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物」（53-56節参照）という言葉があります。また洗礼についても、ニコデモとの対話の中での「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」（3・5）というイエスの言葉がそれでしょう。恐らくヨハネ教団では、人がその共同体に入るには洗礼を受け、入った人は主の晩餐に与かることによって共同体の成員となったことを確認したことと思われます。しかしユダヤ教の会堂追放による圧迫もあって、信仰を失っていく信徒も少なくなかったのではないのでしょうか。ヨハネの信仰共同体は、ここで改めて洗礼・聖餐の意味と内実を説き明かし、聖霊によるイエスの内在とイエスとの合一（14・20など）こそ

「永遠の命」への道であることを信徒に示す必要があったのではないのでしょうか。

「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」(3・6)、「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない」(6・63)という厳しい言葉は、ヨハネ福音書がそうした必要から生まれた、信者への愛の使信であることを語っています。

礼拝について

さて今朝のテキスト4章16節から26節は、「イエスとサマリアの女」と題される逸話の一部ですが、この短い段落の中に「礼拝(する、する者)」という語が10回も出てきます。その主題が礼拝であることがわかります。そしてこの男と女、ユダヤ人とサマリア人という当時としては社会慣習上からも、歴史的背景から言っても到底考えられないような取合せの対話の中で、イエスは先に述べた洗礼や聖餐についての考え方と通底する、極めて根元的^{ラヂイカール}な礼拝観を披瀝したとされています。

まず新約聖書における「礼拝」の語義を簡単に見ておきます。3つの語がありまして、一つはproskyneo、原意は「ひれ伏す」(マルコ5・6)で、新約聖書中58回使われています。次はlatreuo、原意は「仕える」(マタイ4・10)で、26回用いられています。この2つの語の用例を見ますと、その大部分は「神、またはキリストを礼拝した」とあって、礼拝の対象が主な関心事となっています。礼拝の状況(場所、場合)を伝える例が一つありますが、それは使徒言行録13章2節「彼らが主を礼拝し、断食していると」というもので、ここでは、leitourgeo というまた別の語が使われています(用例15回)。これは「何らかの宗教的義務を果す」ことを言い、ここではアンティオキアの信徒たちがパウロとバルナバを伝道旅行に送り出すために、先程申しました「公の」礼拝をしていたことを示しています。このような、いわゆる教会における礼拝を言うものは思いのほか少ないのです。なおこの語はのちにラテン語を経て英語のliturgy になりますが、これは教会の「典礼、礼拝式」を表す語です。

イエスの礼拝概

テキストによると、イエスと対話していたサマリアの女はイエスに自分の個人的弱点を指摘されると急に話題を変えて、「わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています」と言いました。これに対する答がイエスの礼拝観を示す次の言葉です。「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。……今がその時である。…神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

ここにはヨハネ特有の語呂合せがあって、「この山で、エルサレムで」の[・]と、「[・]霊と真理をもって」の[・]も[・]つてとは同じ前置詞で、英語のinです。ということは、ここに礼拝に関してその場所、時（場合）、形式・方法が示されていると言えます。

それでは、[・]霊と真理をもって神を礼拝するとは、どういうことでしょうか。「[・]霊」とは先に「[・]霊から生まれる、命を与えるのは[・]霊」と言われたその「[・]霊」でしょう。サマリア人はゲリジム山で、ユダヤ人はエルサレムで礼拝すると主張しました。そこに神が臨在すると信じたからです。しかしイエスは「この山でもエルサレムでもない所で」と言われた。隠れたところにおられる神は「手で造った神殿などにはお住みにならない」（使徒17・24）からです。むしろ神のすみか、神の神殿は私ども自身です。キリストの十字架によって贖われ、その復活によって義とされて、神の[・]霊が内に住むようになったこの「自分」です。この「内面的な人柄」に神がおられるのであれば、どうして私どもは礼拝の場所として特別の場所を求める必要があるのでしょうか。「神の[・]霊によって」（フィリピ3・3）、いま直ぐに、いまある場所で、ただ神の前に「ひれ伏せば」よいのです。

[・]霊の礼拝において、形式（儀式）はその本質ではありません。「ヘブライ人への手紙」の著者が言うように、人は儀式によってはその「良心を完全にすることができない」（9・9）からです。ですからイエスは「[・]霊と真理によって」と言われたのでしょう。真理、すなわち実体です。「[・]比喩（同節、しるし、象徴）」である儀式に対する実体、礼式に意味あらしめる内実、それはイエス・キリストの十字架と復活の[・]事実であり、同時にその事実を真理であると信じて生きる生の[・]現実です。

ちなみにパウロの礼拝観をもって言えば、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」（ローマ12・1）ということでしょう。神を礼拝するのに一定の日時と、一定の場所と、一定の方式があるわけではありません。ひとりひとりがそれぞれの立場で、それぞれの戦いを戦いながら、神を信じ、キリストに頼り、どんなに破れの多い生活であつてもそのすべてをささげて、誠実に、敬虔に生きていく生活、その生活全体が礼拝なのです。それこそが真理（生活の現実、リアリティ）をもってする礼拝であると思います。だからこそパウロは「これこそ、あなたがたのなすべき」、神の恵みとキリストの福音にふさわしい、道理にかなつた（「なすべき」（協会訳（いわゆる口語訳）では「[・]霊的な」）と訳されたlogikosという語の原意）礼拝であると言ったのです。

イエスの言葉として、ヨハネ教団が告白した礼拝観は以上のようなものでした。

礼拝と礼拝の儀式

では最後に、このような礼拝と、私どもが実際に見聞きし、また参与する礼拝の儀式、すなわち時と所

と形式が一定の儀式的礼拝とはどう違うのか、この二者にどのような関係があるのか、を考えておきたいと思えます。

前回の話の中で、私は「文化の一領域としての宗教」ということを申しました。その意味の宗教は不可避免的に儀式を伴うもので、礼拝においても時と所と形式という枠が不可欠になります。これが前述の英語のリタージで、教会の典礼、聖礼典、礼拝式を言うものです。このことを別言すると、霊は必ず形をもち、信仰は必然的に宗教となり、文化を生むものだということです。ですから、この二者は切り離すことのできない関係にあり、従って儀式的礼拝も人間の生活の中で極めて重要な位置を占めていますが、問題は既に申しましたように、しるしはどこまでもしるしであって実体ではない、儀式的礼拝と霊の礼拝とを混同してはならない、ということです。霊の礼拝が行われて初めて、儀式的礼拝も意味をもつということです。

ヨハネ福音書を読みますと、ヨハネ教団にあつては明らかに洗礼も聖餐も礼拝も儀式として行われていたと思われませんが、そしてヨハネはそれをただ全面的に否定するような言い方をしていないことも明らかですが、先程来繰返し申していますように、霊を強調することによって、そうした儀式に何の関心ももっていないことを明確に示しているように思えます。ここでイエスのそれとして彼らが提示した礼拝観など、およそ宗教としては通用しない、常識外れのものと言わなければなりません。にもかかわらず、ヨハネはイエスはそう教えたと断言し、何の説明も言訳もしていません。ヨハネ教団がラビのユダヤ教の攻撃から自らを守るとともに、自分たちの宗教化といかに必死で戦っていたかを示すものです。このヨハネの信仰は、次の内村鑑三の言葉に実に適切にこだましていると思われるので引用します。

無教会主義とは、教会は有ってはならぬということでない。有るも可なり無きも可なりということである。神の生命たるキリスト教が制度でありオルガニゼーション（組織体）であるべきはずがない。生命は時には形態を取って現れ、時には形態なくして生命そのものとして存在する。……

生命は形態を取りて現るるものであるから、神の霊が時に教会の形態を取りて現るるは少しもふしぎでない。われらはかかる形態を貴び、時におのが身をこれにゆだねるも、決して悪い事でない。しかしながら神と形とが同視せらるる時に弊害は百出する。そして形が神を圧する時に、神は生きんがために形にそむき、これと離れ、これを捨てざるを得ない。無教会主義はかかる場合に起る主義である。貴むべき、なくてならぬ主義である。（「無教会主義について」）

おわりに

以上3回にわたって、甚だ恣意的でありましたが、「宗教とは何か」を考えてみました。

宗教を論ずるからには、まだ死とか来世とか、どうしても取り上げなければならない重要な問題が多々あるでしょうが、私が今回申しあげたかったことを要約すれば、この宗教過剰の時代にあっては、いわゆる「宗教」から脱出すること、出来るだけ「非宗教的」に生きることこそ、むしろ本当の宗教ではないか、ということです。

このことは決して私だけの勝手な議論ではなく、実は聖書自身が証言しているところだと思います。初回の冒頭で私は、新約聖書は「宗教」については殆ど何も語っていないと申しました。「宗教」に当たる代表的な語に *eusebeia*（多く「信心」と訳されている）がありますが、その用例は「牧会書簡」と呼ばれる「テモテへの手紙 1、2」と「テトスへの手紙」に集中しています。これらの手紙はその執筆年代を二世紀初めとする新約聖書中最も遅く書かれた文書に属しますが、そうであるとすると、キリスト信仰は一世紀足らずのうちに早くも（または、やっど？）「宗教」になりつつあったということになります。牧会書簡の内容から言っても、この「宗教化」の事実は明らかなようです。命である福音、力である信仰が、次第に形骸化して「宗教」になっていった状況が窺われるわけです。「ヨハネによる福音書」がそうした傾向に対して、これを止めようとする信仰の戦いの記録であったことは、申しあげてきた通りです。このことを一と口に「*spiritualization*（霊化）」と言うとすれば、聖書は正に霊化の証言の書であると言って宜しいでしょう。

言葉の綾のようになって恐縮ですが、イエス・キリストの福音は決して「宗教」ではない。しかし「わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていない」（使徒 4・12）という聖書の使信に基づいて、イエス・キリストの福音こそ真の宗教であると申しあげて、私の話の結びといたします。

（1997年1月19日、2月16日、3月16日に、「今井館日曜聖書講義」で語ったものを、紙幅に合わせて縮約した）

（所載）『聖書は語る—今井館日曜聖書講義—第2号「宗教とは何か」1997・1—3』

1998年8月